

大門遺跡から出土した弥生土器

1,800～2,000年前のうつわが多く見つかっています

食べ物や水を保存する

つば壺

大きさはさまざま、時期によって形や文様が変わります。




弥生時代の終わりごろは、「羽状文」をつけたものがたくさん作られました。



弥生時代【中期】

お米を調理する

たいつきめ 台付甕

脚がついているおかげで、なべのまわりに火があたりやすい。



たかつき 高杯

脚のついた青の髷のうづつ。写真の土器は高さ30cm。



弥生時代【後期】

年 表	
明治時代～	
江戸時代	安土桃山時代
室町時代	500年前
鎌倉時代★	1000年前
平安時代	A.D.1000年
奈良時代★	
飛鳥時代	
古墳時代★	1500年前
	2000年前
弥生時代★	A.D.1年
	2500年前
縄文時代	3000年前
	B.C.1000年

★……大門遺跡に関係する時代

土器が元の姿に戻るまで PART 1

発掘現場で出てくる土器は、ほとんどが割れてばらばらになっています。土器が割れたままではどのような姿だったのか分かりません。土器をできる限りの姿に復元し、形や文様を明らかにすることで、土器が作られた時代を調べたり、その時代の暮らしを考えたりします。



1 土器を洗ってきれいにします。
土器はゴシゴシ削ると傷ついてしまいます。やわらかいブラシでいかに土を落とします。



2 土器に番号を書く。
この番号は土器がいつの調査で、どこから出たかを示すもの。土器の裏や内側など、見えにくい場所を探して1つずつ手で書いていきます。



小さく、でも読めるように！
まさに職人技です

次回へつづく

令和2年度

大門遺跡

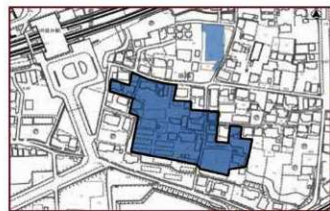
田端地区

発掘調査

区画整理にともなう大門遺跡の発掘調査を始めて3年目となりました。遺跡の西端と南端にて発掘調査を行った結果、建物のあとや、そこで使われた土器が多数出土しました。



大門遺跡MAP



調査位置図

下の写真は、平成30～令和2年度にかけて調査したところを合成したものです。
広い範囲の調査を行うことで
弥生時代のムラの姿がみえてきました。

① 地面を掘り下げ途中でびっくり!

注ぎ口から底までほぼ残っている弥生時代の壺が出土しました。この姿のまま溝の中に入れられたようです。横さなように周りからいねいに掘り出しました。



② いろいろな斧

この調査区からは、異なる形の石斧（石を加工して作った斧）が出土しました。目的に合わせて斧を使い分けていたようです。
大きい斧は深い刃がついていて、木の伐採などに使われたものです。小さい斧は人の指ほどの大きさで、「のみ形石斧」とも呼ばれています。細かな所の調整や仕上げをするために使いました。



③ 区画溝?

南北に延びた長い溝が4本見つかりました。ムラの中の境（区画分け）や、排水路のような役割をもっていたと思われます。溝の中から出てくる土器の特徴により、溝は弥生時代の中ごろに使われていたことが分かりました。

西側にも同じような向きの溝がありますが、こちらからは陶器（高温で焼かれた固いつわ）が出土したことから、江戸時代以降のものだと分かりました。2000年前から現代にかけての生活のあとが残っています。

竪穴式住居（復元）



④ 建物の跡

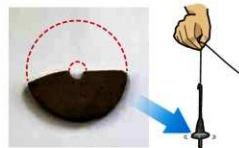
この丸で囲まれた中に、弥生時代の終わりの竪穴式住居が5棟もあることが分かりました。柱が建っていた穴や、家の周りに掘られた円形の溝があり、中央には炉（台所）のあとが残っています。一番大きな住居では、直径7mもありました。

そのうちのひとつの住居の端には、弥生土器の高杯・壺・台付甕などの破片がまとめて置かれていました。引っ越しの時に割れたうつわを置いていったのでしょうか。



⑤ 紡錘車の出土

石でできた薄い円ばん形のもので、中央には穴が空いています。これは糸を巻くための道具の一部分で、「紡錘車」と呼ばれています。木の部分がなくなり、石でできた部分だけ現代まで残りました。大門遺跡でも紡錘車で巻いた糸を使って、服などを作っていたのかもしれない。



⑥ 何を焼いていたんだろう?

土が赤く焼けて固くなっています。一般的な住居の炉（台所）と比較するととても良く焼けていて、長い時間火を使っていたようです。



現在の地面から50cm下で弥生時代や古墳時代の暮らしの跡が見つかりました。